Ⅳ 福島分科会の概要

テーマ 若者達が活躍する『持続可能なまち・地域・社会』

開催日 平成24年11月10日(土)、11日(日)
会　場 コラッセふくしま（福島県福島市）

趣旨・概要

震災ボランティア活動等を通じて見えてきた地域独特の課題や回復可能性、地域再生のために必要なまちづくり・ひとづくりの方向性について、全国の学生・若手社会人、さらには市民やシニア層も交えて、同じ目線で議論を行った。

分科会内容

平成24年11月10日(土)

(1) オープニングセレモニー

① 主催者挨拶

主催者である入戸野修氏（福島大学学長）及び笠浩史氏（文部科学副大臣）からそれぞれ挨拶が行われた。

② 箏曲演奏

福島市出身で福島県しゃくなげ大使でもある遠藤千晶氏（生田流箏曲演奏家）により、格調高い箏曲が演奏された。

曲目：沢井　忠夫　作曲　＜楽＞

③ 詩の朗読

福島県「詩の寺子屋」事業の参加中学生、掃部良太さん（福島市立福島第三中学校３年）、和合大地さん（福島大学附属中学校２年）の２名による詩の朗読が行われ、震災後の心境の変化が表現された。

(2) 基調講演

演題：震災後の東北福島で活躍する若者たちを見つめて
講師：大和田　新 氏（株式会社ラジオ福島アナウンサー）
ゲスト出演：南原　怜奈 さん（福島県立福島工業高等学校　生徒）
　　髙野　　桜 さん（福島県立小高工業高等学校　生徒）

講演前半では福島県内の被災地で活動している若者について講演され、後半では大和田アナが南相馬市小高区出身の高校生二人にインタビューした。

（主な内容）

【講演部分】

○　福島県の復旧・復興のためには、教育と医療が必要。原発の廃炉まで40年という気が遠くなるような福島県の復旧・復興を支えるのは若者たちである。今、福島県の若者たちが懸命に前を向いて頑張っている。

○　震災以来、私は700名以上の中高校生にインタビューをしてきたが、最後に必ず「あなたは、将来何になるんですか」と、将来の夢を聞いた。中高校生は必ず、「人の役に立つ仕事につきたい」と言う。そういう子どもたちが圧倒的に多いのが福島県である。

○　「学校に行けることが楽しい」、この子どもたちの言葉を私たちは真摯に受けとめていく必要がある。

【インタビュー部分】

●小高工業高校を目指した理由

○　先輩の多くが小高工業に進学し、その後東京電力に就職する方がとても多くいた。地元では東京電力は入りたい会社の一つであり、就職できればいいと考え、入学した。

●原発の安全性

○　原発が事故を起こすということは考えていなかった。原発に詳しいわけではないが、周りが安全だというので安全なんだと思っていた。

【インタビュー部分】

●この１年８カ月を振り返って一番大変だったこと

〔南原〕避難所での生活。避難所での生活はプライバシーがなく、ストレスが溜り、大人たちの怒鳴り声などを聞いたりすると、とても悲しい気持ちになった。

〔髙野〕小高工業高校のサテライト教室に通っている時に常に一人というのがすごくつらかった。やはり人は支え合えるからこそ生きていられる。

〔南原〕小高工業高校から福島工業高校に転校したことで、両校の架け橋になりたかった。両方の学校が好きだが、逆にそれはいいのか、とか、福島工業高校で小高工業高校のことを話しすぎてはいけないのではないかという心の葛藤がありながらも頑張った。

〔髙野〕福島の現状は、伝えていかないと広まらないし、このことを忘れていってほしくない。

●卒業後の夢

〔髙野〕先生になって、母校である小高工業高校に戻りたい。先生方は自分も被災者でありながら、家族よりもすごく私たちのことを考えてくれた。

〔南原〕漠然とした夢だが、小高工業高校の復興。そして復興した小高を、今まで震災を通して交流してきた方々みんなに見ていただきたい。

(3) 小会議

３会場に分かれて小会議（事例発表）が行われ、全国の先進的な取り組み事例に参加者は真剣に聴き入った。

【小会議１】

テーマ：「学生・若手社会人の全国的なネットワーク構築を目指して」

芝原　浩美 氏（NPO法人ユースビジョン事務局長）

（主な内容）

○　ユースビジョンのミッションは「若者と社会をつなぐ活動」。

○　東日本大震災に関連した取り組みとして、「いわてGINGA－NET」協力、「つなプロ」、セミナー開催、石巻復興支援ネットワーク運営協力などを行ってきている。

○　ネットワーク構築のためには、普段の地域活動への参加・参画、小さなつながりを大事にすること、情報発信が重要だと考える。

山口　小百合 氏（ふくしま復興支援学生ネットワーク会長 学生）

（主な内容）

○　ふくしま復興支援学生ネットワーク設立の目的は、第一に、情報やノウハウの共有と、福島県内の学生による復興に向けた継続的な支援活動、２つ目に福島県内で復興に向けて取組をしている学生の窓口となること、３つ目に団体や各個人が成長し、学び合いができる場をつくること、である。

○　ネットワークの意義は、ネットワークを通じてボランティア同士がサポート、相互補完できることにある。
○　ハード面の復興は順調だが、目に見えない部分、心の復興がまだ遅れている。また、今後はただ活動するだけでなく、専門知識や意識をもっていくことが必要である。

宇都　真太郎 氏（日本文理大学工学部 学生）

（主な内容）
○　あゆみプロジェクトとは、日本文理大学が被災地児童支援実践として、南相馬市の子どもたちを大分に招いてさまざまな活動を行ったもの。
○　①新しい仲間と思い出を与えられる活動である、②参加児童には、勇気と自身の可能性を感じてもらう、③土地の文化、歴史やコミュニティーをお互い学び、興味を持つ、④大学生による安全で有意義な児童教育ボランティアの提供、という４つの意義を提案できる。
○　子どもの成長を見ることができただけでなく、自分たちも成長することができた。

【小会議２】
テーマ：「学生とNPO・企業等との連携」

土谷　一貴 氏（福島大学災害ボランティアセンター 学生）
安達　隆裕 氏（福島大学災害ボランティアセンター 学生）

（主な内容）
○　避難所運営を皮切りに、福島大学災害ボランティアセンターを立ち上げ、現在は被災地現場での復興支援活動、仮設住宅・民間借り上げ住宅の生活支援活動、子ども支援に重きを置いて活動している。
○　学生だからできることは、フランクなコミュニケーション能力による人々への寄り添いである。
○　他の機関と連携するにあたって、下請状態にならないように、企画段階から主体性を持つこと、何でも屋・便利屋からの脱却、互いにアイデアを出し合い一緒に活動する、といったことが重要だと考える。
○　我々の活動は震災ボランティアであり、寄り添い型の支援。そして継続しなければいけない。継続によって関係性が生まれる。

荒井　優 氏（公益財団法人東日本大震災復興支援財団専務理事）

（主な内容）
○　今回、震災を通じて、個人と組織との主従関係のようなものについて、一つ限界みたいなものが見えたのではないかと感じている。自分は、常に組織を守る側より、個人を守る側に立っていたいと思う。
○　連携ということは、組織と組織、国と国とで連携するわけではなく、やはり最後は人と人でやりとりをするもの。

立花　志明 氏（福島県中小企業家同友会福島地区FMD委員会委員長）

（主な内容）

○　中小企業家同友会は、中小企業の経営者、または経営幹部が、会社や地域経済を活性化するために、経営の質を上げようと勉強している団体である。その同友会が、福島の大学の知恵と、経営者の知恵をマッチングして活動しようとFMD委員会を立ち上げた。

○　震災後は、福島の復興をテーマに、学生の視点、発想を経営者と一緒に考えて提言したいとの思いで活動している。

○　FMD委員会では、中小企業に対する学生のイメージを変えられるなど、さまざまなメリットがある。また、この活動を続けることでさらなる連携を深めることができると考える。

【小会議３】

テーマ：「震災経験から立ち上がる子どもたち」

渡部　雅憲 氏（福島大学人間発達文化研究科 学生）

内藤　圭史 氏（福島大学人間発達文化研究科 学生）

（主な内容）

○　OECD東北スクールは、東北や日本の未来の担い手を育成することを目的としており、イベントの企画や実行という課題を設定し、プロジェクト学習を実施することで子どもたちが主体性を発揮することを目指している。

○　OECD東北スクールは、プロジェクトゴールを2014年８月にフランス、パリで東北の魅力をアピールするためのイベントを参加者みずからが企画し、実行すると設定している。

○　これまでのスクールを通じ、様々な学習をしていく中で、子どもたちが力を合わせて企画し、行動できるようになった。また参加した子どもたちも自身の成長を感じている。

滝澤　拓也 氏（福島大学人間発達文化学類　学生）

根本　真理 氏（福島大学人間発達文化学類　学生）

（主な内容）

○　子ども支援ボランティアは主に中通りに避難してきた子どもたちの支援活動で、これまでの状況によって４つの期間に分けられる。１期は避難所での活動、２期は仮設住宅での活動、第３期からは大学でのこども土曜キャンパスという学習支援が中心。

○　状況によって子どもたちにも様々な変化が現れるため、子どもとの接し方について学生側の視点、子ども側の視点、両方から考え、見直しを繰り返してきた。

○　活動を通して、本当にたくさんのことを感じ、学ぶことができた。学生と子どものかかわりだけでなく、今まで目を向けていなかった子ども同士の関わりという視点を持つことができるようになった。

北見　靖直 氏（独立行政法人国立青少年教育振興機構指導主幹）
（主な内容）

○　震災後、福島県内２か所でリフレッシュキャンプを行った。子どもたちは葛藤を乗り越えていったことがよかった。そのときに子どもたちの生きるエネルギーが生まれて、成長できる。

○　いろいろなことを考え、感じている中学生・高校生だからこそ、中高校生にも非日常であるキャンプは必要だと考える。

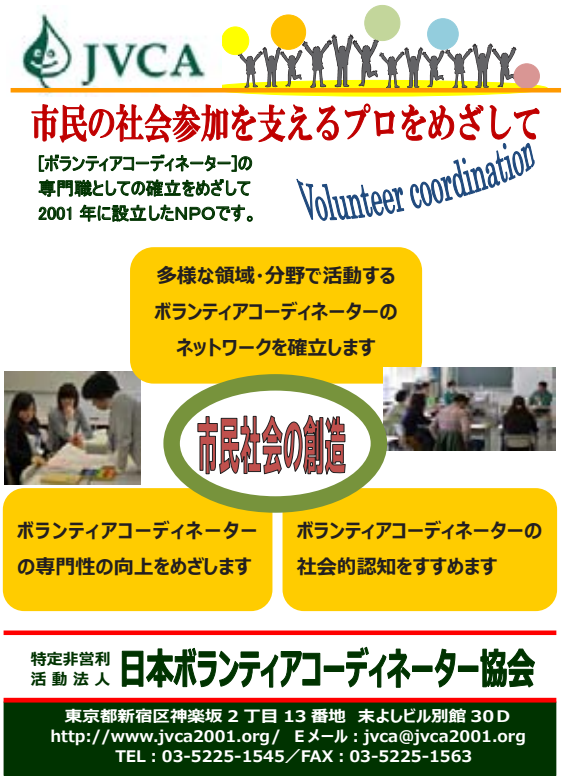
○　何かを与えるということではなく、子どもたちと走り回って、追っかけまわして、取っ組み合って、一緒に飯食って、風呂入って、一緒に寝て、そして本気でしかるという、これが子どもたちに本当の意味で寄り添うことだ。

(4)　ポスターセッション

１日目の午前中に、参加者のアイスブレークを目的として、福島県及び全国で積極的かつ先進的なボランティア活動を行っている１３団体のポスターを展示し、それぞれの活動を積極的に発表した。参加団体と来場者、参加団体同士の交流が図られた。

■出展団体等によるポスター例

福島大学災害ボランティアセンター
（被災者生活支援とこれから）



日本ボランティアコーディネーター協会
（復興を支えるコーディネーション）

■出展団体

No	団　体　名	テ　ー　マ
1	ふくしま復興支援学生ネットワーク	ふくしま復興支援学生ネットワークについて
2	福島大学災害ボランティアセンター	震災から一年半を過ぎた被災者生活支援とこれから
3	公益財団法人 東日本大震災復興支援財団	共に過ごしている
4	日本大学工学部 「地域連携活動研究会 R.I.S.M.」	R.I.S.M.の活動について
5	NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会（JVCA）	復興を支えるコーディネーションのチカラ
6	フクシマ環境未来基地	環境と福祉の連携
7	福島県立医科大学赤十字奉仕団	被災された方のために私たちが出来ることを
8	日本文理大学　人間力育成センター あゆみPROJECT	遠隔地による被災地支援
9	OECD東北スクール	震災をバネに新しい教育を
10	福島大学人間発達文化学類 子ども支援ボランティア	被災した子どもたちとの関係づくり
11	日本福祉大学 災害ボランティアセンター	学生と学生の連携
12	桜の聖母短期大学	桜の聖母短期大学移動文化祭事業 「今日ゆうSmile ～桜でつなぐ笑顔のわ～」
13	NPO法人 市民公益活動パートナーズ	市民公益活動パートナーズについて

平成24年11月11日(日)

(5)　熟議

テーマ：みんなで震災経験を語り合おう！
　　そして今自分にできることは何かを見つけ出そう！

①　趣旨説明

熟議は10人弱の少人数に分かれ、10グループで行われた。各グループのファシリテーターの進行のもと、参加者それぞれが震災経験を語り合ったのち、その経験談から見えてきた課題について、ささいなことでも今われわれにできることは何か、という観点で、グループ内での解決策を探った。

②　結果発表

熟議によって得られた課題と解決策について全グループの発表が行われた。

●各班から出された主な課題や意見

A班

○支援のあり方、組織の在り方、情報がうまくキャッチできなかった。
○個人でできること、組織でできることがある。
○個人では、決意を持って生きること、経験を必ず伝えること、普段の心がけが大事。
○組織では、人材育成と学びの場づくりと、支援のあり方を変えることが必要。

B班

○資金の問題、継続していく問題（次世代にどう伝えていくか）。
○風化させないよう常に情報を発信していく。
○長期にわたる復興のため、被災者というマイナス面だけの発信はよくない、情報の選別が必要。

C班

○情報が重要であり、風化させないことも重要。
○そのために正確な情報発信を、個人、組織がそれぞれ行うことが必要。また、それを定期的に継続してくことも必要。
○情報発信のために、フェイスブックの利用や友達に話すといった個人でできることから組織的な形へつなげていくことが重要。

D班

○復旧復興のために、さまざまな問題が考えられる。ネットワーク構築のための人材不足、伝承の仕方、行政の支援のあり方、支援者と被支援者との関係、認識の差などが挙げられた。
○行政の問題には我々個人では何もできないが、選挙に参加することで意思を表明することは重要。
○個人でできることには限界があるのでネットワークつくりが重要。
○一人一人が真剣に考え、考えることが復旧復興につながってくる。

E班

○コミュニティーづくり、人づくりとして人間味がある活動はどういうことができるか。
○キーワードは、あいさつ、声かけ、笑顔、傾聴。
○自分の存在意義を感じてもらえるような、少しの工夫をしてよい関係を作っていけるとよい。

F班

○子どもと親の関係が問題。親が活動させたいと思っていないと子どもが参加しない。
○親と子の意見や希望の相違。
○より多くの人に復興に関心を持ってもらうにはどうすればよいか、また、子どもに震災をどのように伝えていくべきか、という問題については、ソーシャルメディアを活用したり、さまざまな機会に自分たちの活動・経験・体験を皆に伝えることが大事。
○常にそばに立って寄り添う気持ちが大事。

G班

○ボランティア活動をしている人がどんどん減少している。
○情報を共有していくにはどうしたらいいか。また、それを発信していくためにはどうしたらいいか。
○組織のマネジメント力不足。
○外部との連携、または県外の学生との連携をどのようにこなしていくか。
○資金不足。活動資金をどうやって調達するか。
○ボランティアで学んだことを後輩たちにどう生かしていくか、どう継承していくか。
○世代継承作業をつくっていく。
○被災者の方々のことを掘り下げていく、会話と傾聴が求められている。
○学生ボランティア団体の交流会などを開くことによって情報の共有化を図る。

H班

○避難者受け入れ側の問題として、様々な情報が交錯していた。
○フェーズが変わって１年、２年たつにつれて、生活に密着した問題が増え、県外避難や借り上げ住宅の問題がでてきた。
○県外の方を含めたくさんの人に福島の現状を知ってもらうことが必要。
○一人一人が主体になって地域に入り込んでいって、当事者性を持って震災の復興、支援に取り組んでいく。
○再生ではなくて作っていく。
○もともとあったコミュニティーの資源、人や地元性というところをうまく使って、元あるものを使って復興に向かっていく。

I班

○放射能の問題。これを解決せずして福島の復興はありえない。専門家の不足や風評被害なども含め知識・情報の不足が問題をさらに複雑に。
○福島の正しい情報、前向きな部分だけでなくマイナス部分も含めて発信することが重要。
○心のケアが必要。
○被災地のニーズと被災地以外のシーズをどうマッチングさせていくか。
○まず正しい情報を発信していくということ。風評が実害とならないよう正確な情報を発信していく。危険な情報であっても、それを隠さない。そういったところから解決につながっていく。
○SNSの活用が大事。
○被災地のニーズを正しく把握し、被災地みずからが頑張る取組をボランティアが支援する仕組みになっていくべき。

J班

○動物の保護も重要。ペット専用のシェルターを用意するなど必要では。
○遠隔地から応援していることを被災地や他の県外にも伝え、広げていくことが私たちができること。
○支援の継続が重要。
○交流と発信、継続、そして具体的なアクションというようにつながっているのではないか。

③　クロージング

実行委員からの感想が述べられたあと、上月正博氏（文部科学省大臣官房審議官）から熟議の講評があった。最後に、小沢喜仁氏（福島大学副学長）の挨拶をもって全日程を終了した。

上月　正博　氏（文部科学省大臣官房審議官（生涯学習政策局担当））による講評

（主な内容）

○　このフォーラムを実施してみて、みんな前を向いた気持ちにかなりなってきていると強く認識した。ファシリテーターの方々の様々な工夫、努力による部分もあり、参加している人の思いもよく出ていた。

○　この震災では今まで表面化しなかったことがわかり、情報のもつ二面性にも気づいた。こうした状況では、学びながら自分で考え判断し、自分の責任で行動することが重要になってくる。